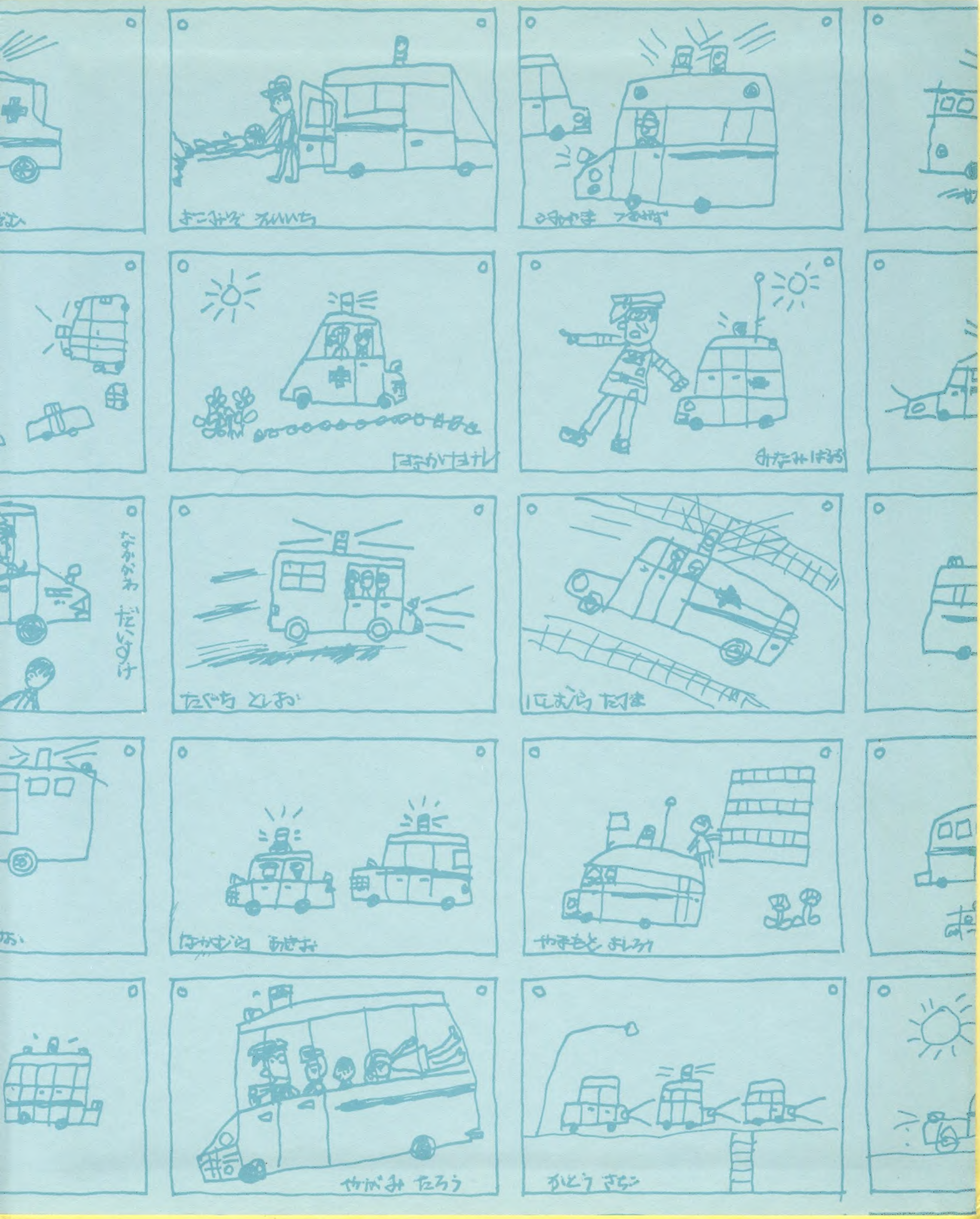
きゅうきゅうしゃのぴぽくん

≪のりものストーリー≫



砂田 弘 作　高橋 透 絵



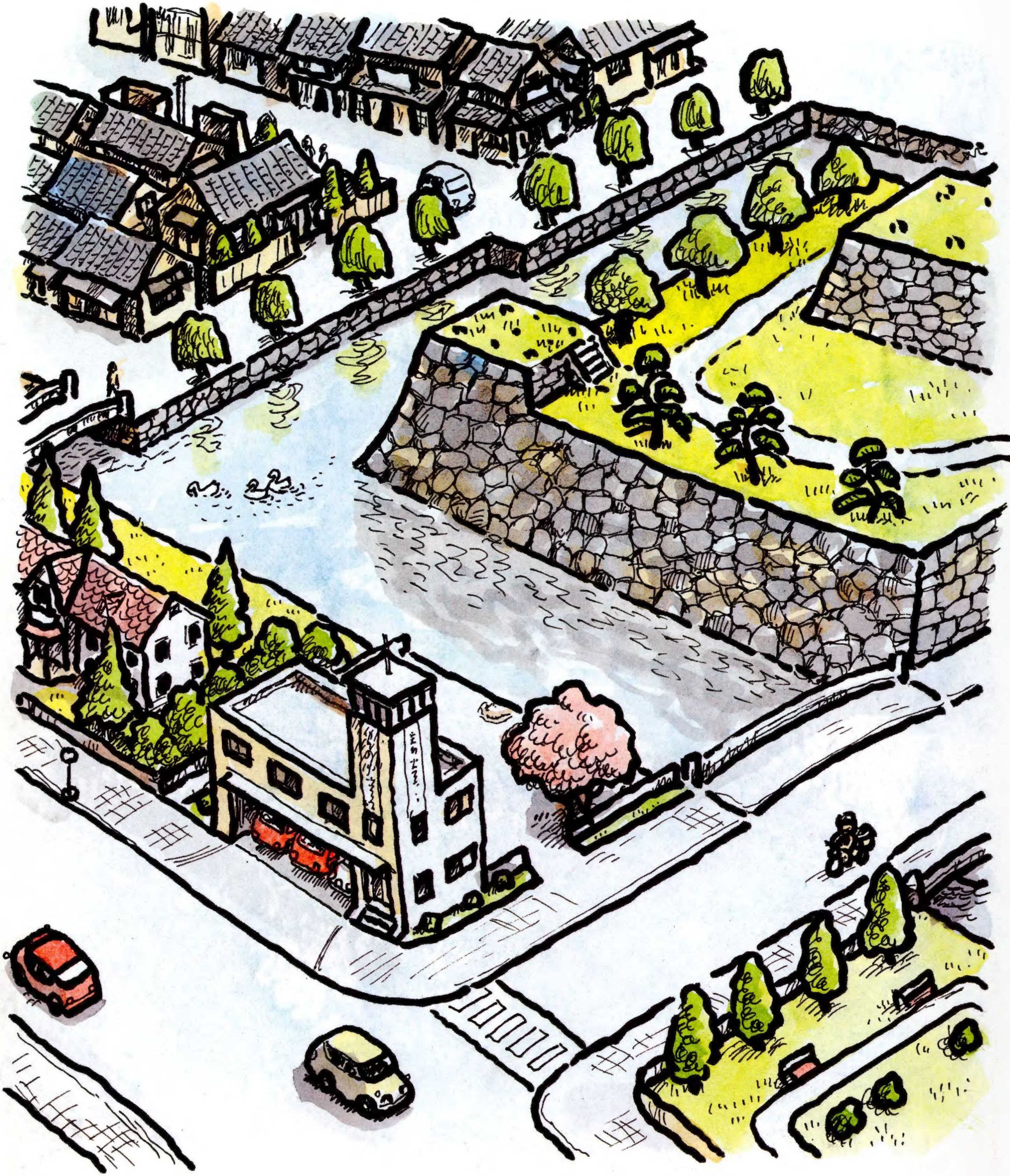
たぐち としお
たかがわ だいすけ
やがみ たろう
かとう さちこ

きゅうきゅうしゃのぴぽくん

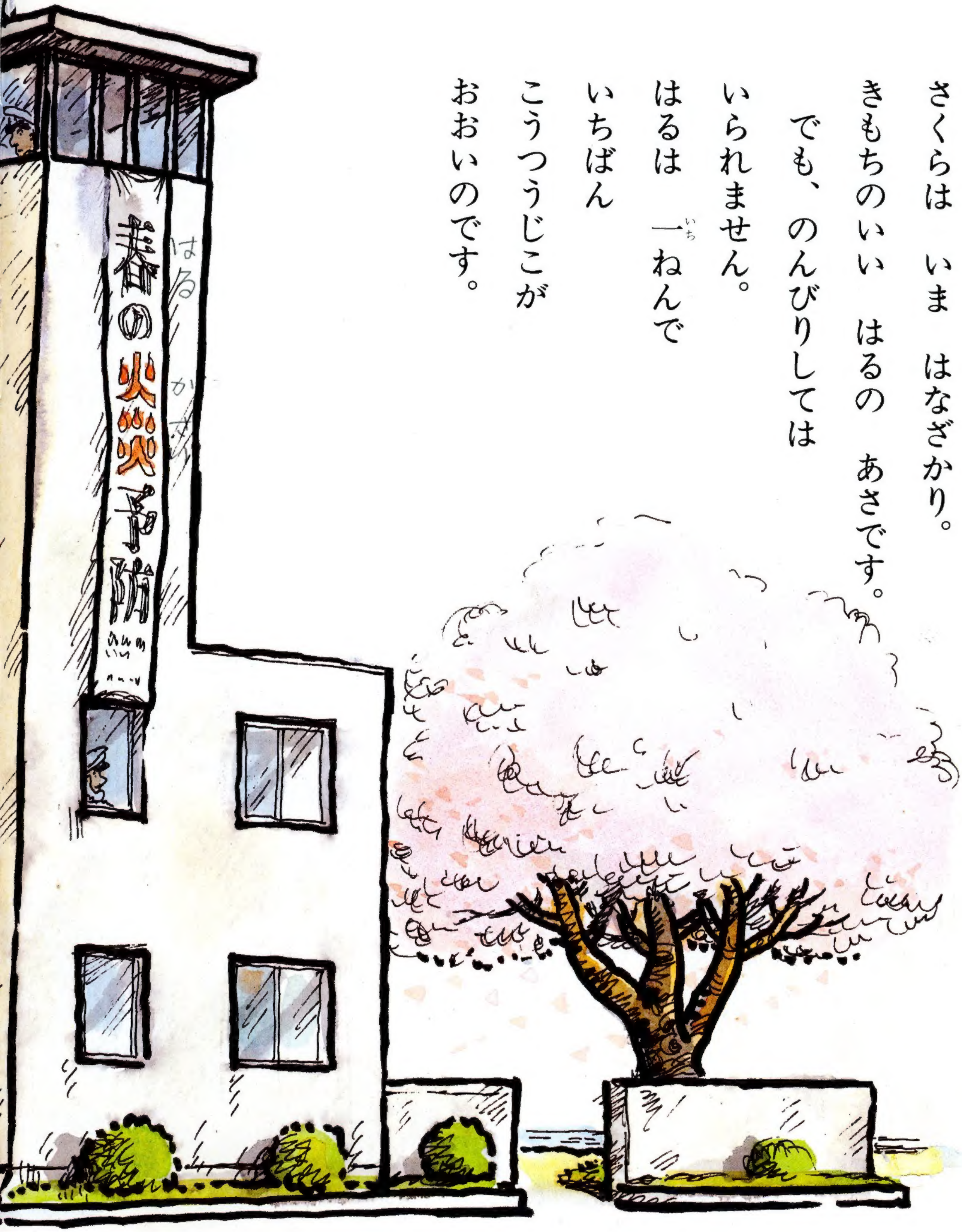
砂田　弘（すなだ　ひろし）作　高橋　透（たかはし　とおる）絵



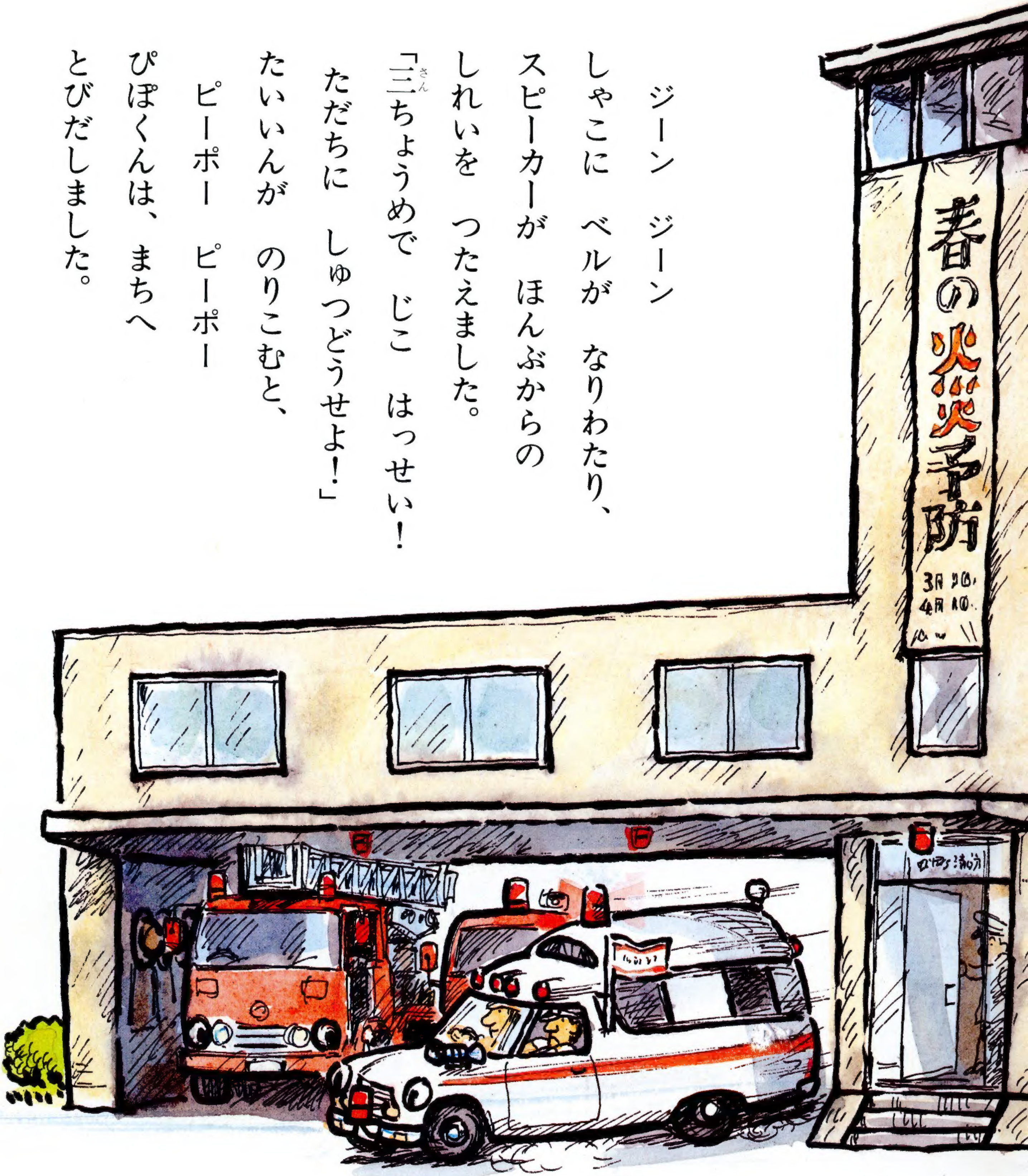
ここは　みどりまちしょうぼうしょ。
はしごくん、ポンプくんと　いっしょに
ぴぽくんという　なの
きゅうきゅうしゃが　いました。
そんな　なまえ、だれが　つけたのかですって？
もちろん　まちの　こどもたちです。



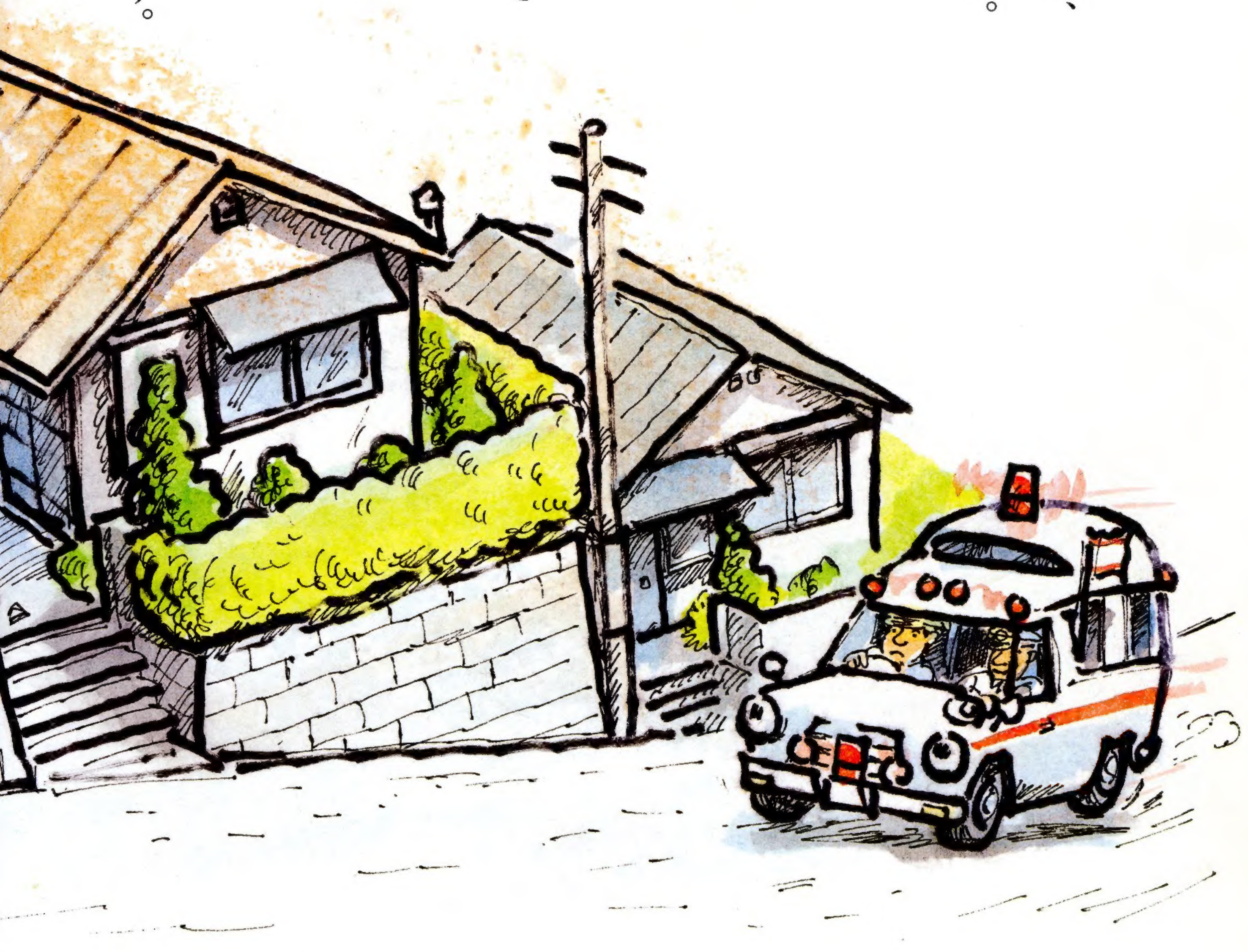
しょうぼうしょの　にわの
さくらは　いま　はなざかり。
きもちのいい　はるの　あさです。
でも、のんびりしては
いられません。
はるは　一ねんで
いちばん
こうつうじこが
おおいのです。



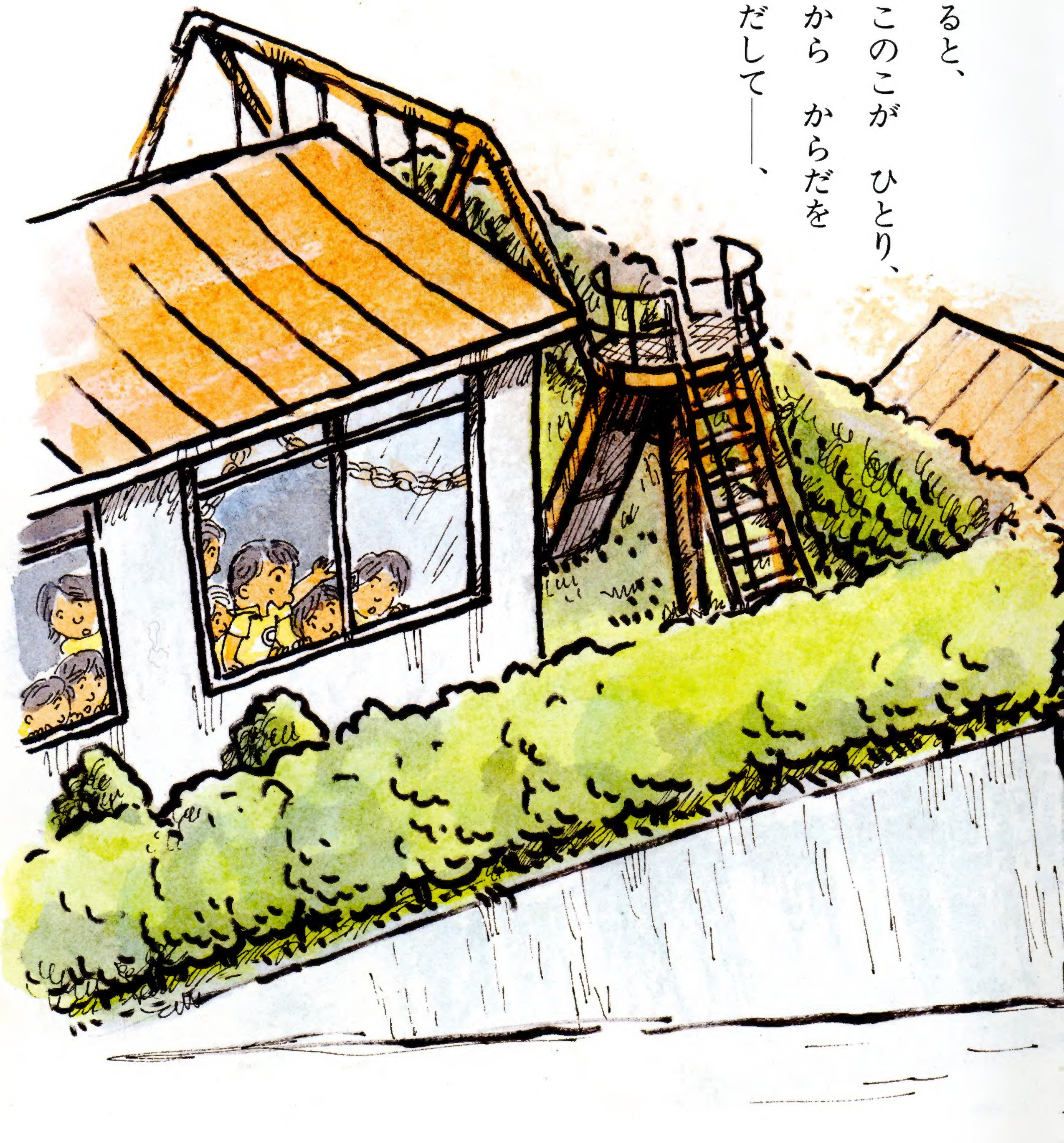
ジーン　ジーン
しゃこに　ベルが　なりわたり、
スピーカーが　ほんぶからの
しれいを　つたえました。
「三(さん)ちょうめで　じこ　はっせい！
ただちに　しゅつどうせよ！」
たいいんが　のりこむと、
ピーポー　ピーポー
ぴぽくんは、まちへ
とびだしました。



さかを　のぼると、
みぎは　みどりようちえん、
ひだりは　みどりこうえん。
「ぴぽくんだぞ！」
　ひとり、また、ひとり、
まどから　おとこのこが
かおを　だしました。
おとこのこは　みんな
きゅうきゅうが　だいすき
なのです。
　おんなのこは
うしろのほうから、
そっと　のぞいています。
きっと、こわいのでしょう。



すると、
おとこのこが　ひとり、
まどから　からだを
のりだして――、

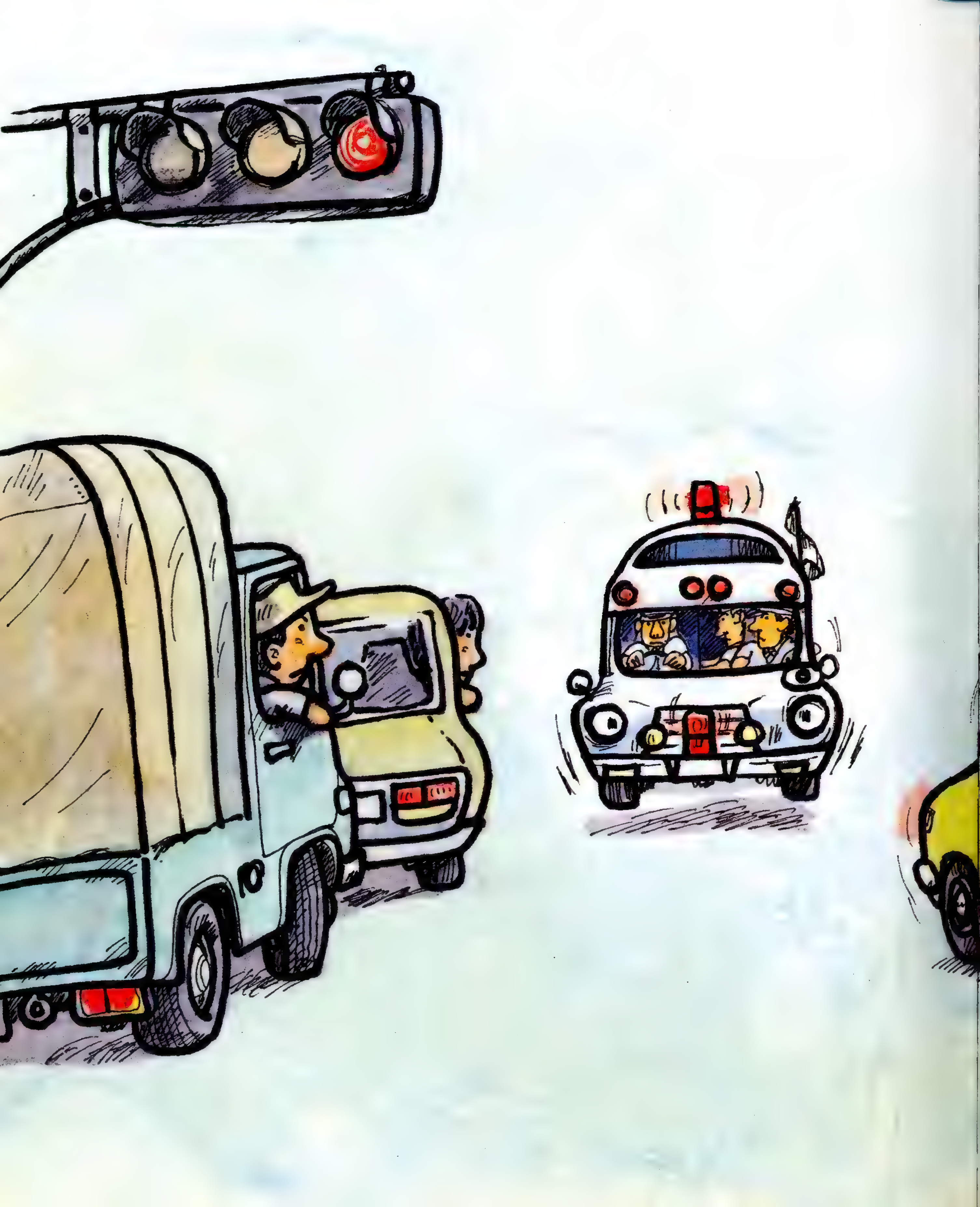


「がんばれ！　ぴぽくん！」
と、さけびながら、てを　ふりました。
えんで　いちばん　わんぱくの　マサシくんです。
きいろい　うわぎに　きゅうきゅうしゃの
ししゅうが　してあります。
「きゅうきゅうって　えらいんだぞ。
けがをしたり、びょうきになった　ひとを
たすけるんだよ。」
ぴぽくんは　すっかり　うれしくなって
ピーポー　ピーポー
ひときわ　たかく　サイレンを　ならしました。

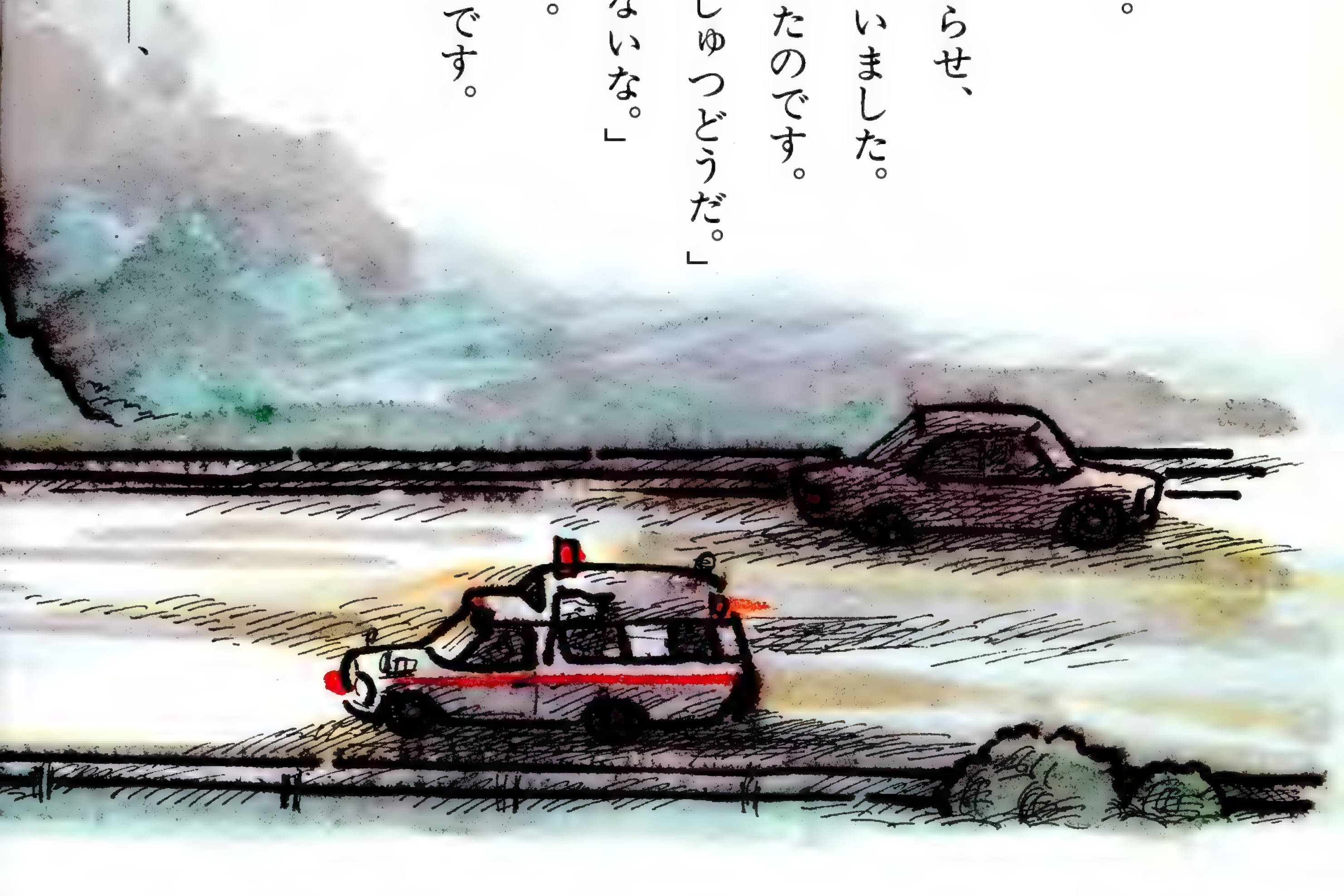


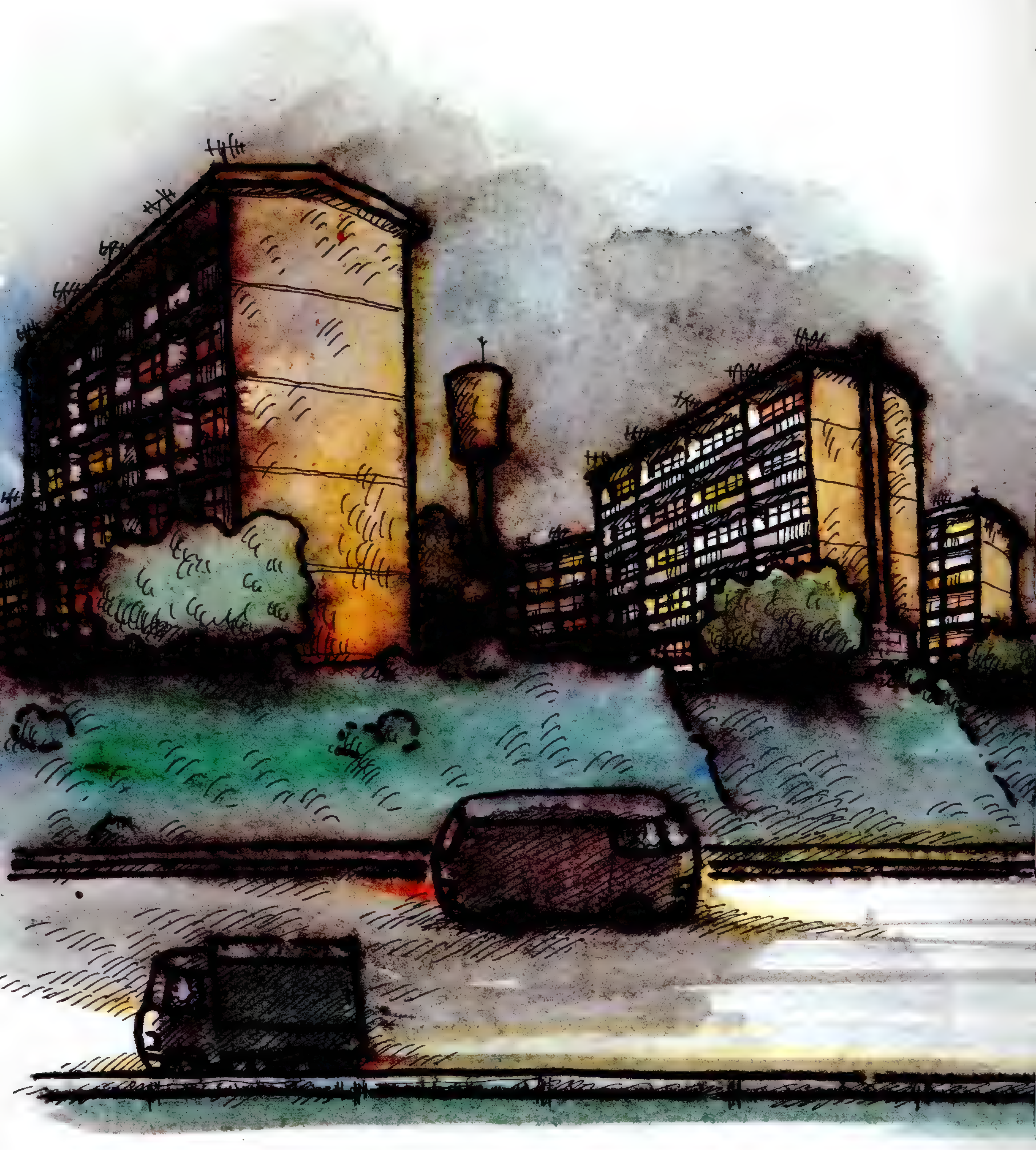
さかを　おりた　ぴぽくんは、
ピーポー　ピーポー
おおどおりを　まっしぐらに
はしっていきます。
しんごうが　あかでも
へいきです。
ほかの　くるまは、みちを
あけます。
　でも、おとなたちときたら、
みんな　しかめっつらをして、
「ちぇっ、また、じこか。」
「よわったたな。かいしゃに
　おくれてしまうじゃないか。」
と、もんくばかり　いっています。





よるに　なりました。
そらには、きらきら　はるの　ほし。
　ピーポー　ピーポー
ぐるぐる　あかい　ライトを　ひからせ、
ぴぽくんは　こくどうを　はしっていました。
だんちで　きゅうびょうにんが　でたのです。
「あさから　これで　十(じゅっ)かいめの　しゅつどうだ。」
「いそがしくて、やすむ　ひまも　ないな。」
　たいいんたちが　はなしています。
　ぴぽくんだって、もう　くたくたです。
けれども、
「へこたれて　なるものか。」
と、がんばっているのです。
　それなのに、だんちに　つくと――、







一かいの　まどからは、
「うるさくて　ねむれないじゃないか。」
二かいの　まどからは、
「ほんとうに　はためいわくだわ。」
そして、三がいの　まどでは、
「いつまでも　ねないでいると、きゅうきゅうに　つれて
いかれますよ！」
と、おかあさんが　こどもを　しかっています。
ピーポー　ピーポー
おいたてられるように、ぴぽくんは　きゅうきゅうびょういんへ。



ところが――、
びょういんの　げんかんに
かんごふさんが　とびだしてきました。
「まんいんです。となりの　まちの　びょういんへ
はこんでください。」
　そこで　ぴぽくんは、また、よるの　みちを
となりまちの　びょういん　めざして　はしりました。





ぴぽくんが　しょうぼうしょに　かえってきたのは
まよなかの　二じでした。
しゃこでは、しょうぼうしゃたちが　きもちよさそうに
ねむっています。
「はしごくんや　ポンプくんは　いいな。
かじは　まいにち　ないものな。」
ぴぽくんは　ためいきを　つきました。
「ぼくは、あさから　ばんまで、はたらきどおしだ。
それなのに　みんなは、ぼくの　わるくちばかり　いっている。
ああ、これじゃ、わりに　あわないな。」
そのときです。ぴぽくんは　ふと、マサシくんのことを
おもいだしました。
「そうだ。ぼくには　すてきな　ともだちが　いるんだ。
げんきを　だして　がんばらなくっちゃ。」



なつが　やってきました。
あるあさ、ぴぽくんが
きゅうびょうにんを　のせて
びょういんめざして
はしっていると、
二ちょうめの　かどの
いえの　もんから、
「おはよう、ぴぽくん！」
げんきのいい　こえが　しました。
マサシくんでした。
　ピーポー　ピーポー
「おはよう　マサシくん！」
　ぴぽくんも　まけずに
ちからいっぱい　あいさつしました。





ピーポー　ピーポー



びょういんからの　かえりに
ようちえんの　まえを　とおると、
ちょうど　おやすみの　じかんでした。
「きゅうきゅうだ！　ぴぽくんだ！」
こどもたちは　おおさわぎ。
すべりだいの　てっぺんの
てすりの　うえに　のっかって、
「ぼく、おおきく　なったら、
きゅうきゅうの
うんてんしゅに　なるんだ！」
むちゅうで　てを　ふっているのは
マサシくんです。
「だいじょうぶかな？」
ぴぽくんは　ちょっと　しんぱいです。



ボーンと　ひとつ　しゃこの　とけいが　なって
ひるの　一じを　しらせたとき、
ジーン　ジーン、ベルが　なりました。
「みどりこうえんまえで　じこ　はっせい！
ただちに　しゅつどうせよ！」
それっ！
ピーポー　ピーポー
ぴぽくんが　こうえんへ
かけつけてみると――、





「いきなり、トラックが　とびだしてきて……。」
ようちえんの　せんせいが、
おとこのこを　だきかかえて　いました。
ぴぽくんは　びっくりしました。
マサシくんでは　ありませんか。
「さあ、はやく！　せんせいも　のってください。」
たいちょうが　さけびました。
ようちえんの　もんの　そばでは、こどもたちが
しんぱいそうに　ぴぽくんを　みつめています。







いそげ、いそげ！　びょういんへ。
ぴぽくんは　むちゅうで　はしりました。
「ねむったままだが、だいじょうぶだろうか。」
と、たいちょうの　こえ。
「さあ、あたまを　ひどく　うってるようですからね。」
と、わかい　たいいんの　こえ。
「なんて、らんぼうな　トラックだ。」
「むめんきょ　うんてん　だったらしい。
ひどい　やつですよ。」



びょういんに　つくと、
マサシくんは　たんかで　しんさつしつへ。
「たいした　けがで　なければ　いいけどなあ。」
ぴぽくんは　まどを　みあげました。



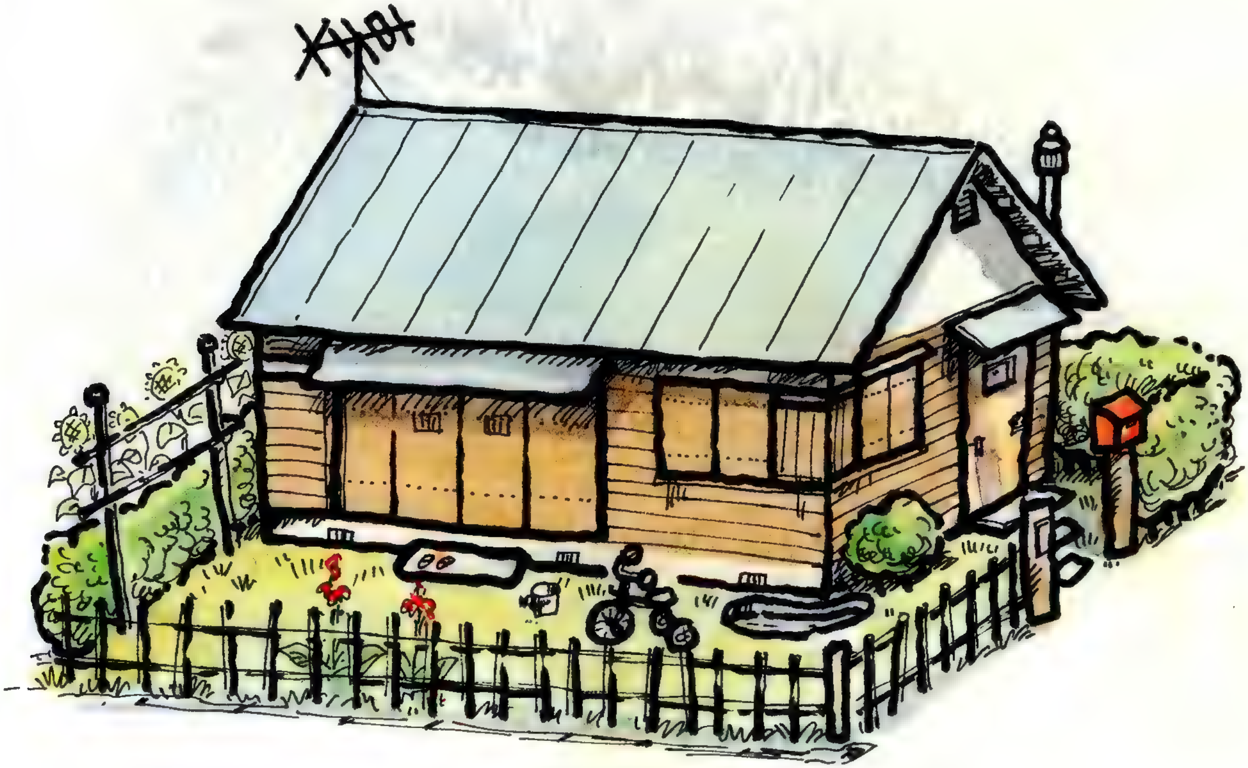




なつやすみに　なりました。
ミーン　ミーン
しょうぼうしょの　にわの　さくらのきで　せみが　ないています。
「ぴぽくん、どうしたのかい。ちっとも　げんきが　ないじゃないか。」
はしごくんが　きくと、
「かおいろが　よくないよ。ちょうしが　わるいんじゃないかい。」
ポンプくんも　ききました。
「ううん、なんでもないよ。」
ぴぽくんは　こたえましたが、ほんとうは
マサシくんの　ことが　きがかりで　ならないのです。
だって——、



マサシくんの
いえの　まえを
とおっても、
いえは　しんと
していて、
げんかんも、
まども
しまったままです。
「マサシくん、
まだ　にゅういん
したきりなのかな。」





ようちえんの
まえを　とおっても、
ようちえんは
ひっそりしていて、
こえ　ひとつ
きこえません。
「マサシくんも、
こどもたちも、
あれから　ぼくが
きらいに
なったんじゃ
ないのかな。」



そして、びょういんへ　いくと――、
びょうしつの　まどは　みんな　しまったきり。
マサシくんが　どうなったのか
ぴぽくんには　わかりません。
ヒーホン　ヒーホン
ちかごろでは　ぴぽくんの　サイレンの　おとも
すっかり、げんきが　なくなっていました。



ひゅうん　ひゅうん　ぴゅるるるる
おおかぜの　ふいた　なつの　ゆうがた、
みどりまちの　えきまえの　ビルが
かじに　なりました。
ウーウーウー、カンカンカン
しょうぼうしゃの　しゅつどうです。
せんとうに　ポンプしゃ、
つづいて　はしごしゃ
その　あとから、ぴぽくんも
ぜんそくりょくで
すっとばします。







四かいだての　ビルが、もくもく
くろい　けむりを　はいています。
にげおくれた　ひとを　はしごしゃが
つぎつぎに　たすけだします。
「おーい、けがにんを　たのむぞ！」
ピーポー　ピーポー
ぴぽくんは、ビルと
びょういんの　あいだを
いくど、いったり、きたり
したことでしょう。
でも、だれ　ひとり、
「ごくろうさん。」
と、こえを　かけてくれる　ひとは
いませんでした。



しょうぼうしょの　にわさきには、まっかな　カンナの　はな。
そらには　きれいな　いわしぐも。
あきが　きたのです。
あるあさ、ぴぽくんは、うらの　いけの　そばで、
たいいんたちに、からだを　あらって　もらって　いました。
「ずいぶん、よごれたな。きずも、たくさん　ついてるし。」
ぴぽくんは、いけに　うつった　じぶんの　すがたを　みました。
「いっしょうけんめい　はたらいたから　こんなに　なったんだ。
それなのに　ぼくは、ひとりぼっちだ。
ああ、もう　はたらくのが　いやに　なったな。」
すると、そのとき、
だだだだ　だっと、あしおとがして――、



「いた　いた　いたぞ！」
こどもたちが　おおぜい　かけてきました。
てにてに　えをかいた　かみを　もっています。
みんな　ぴぽくんの　えでした。
「ぴぽくんが　ぼくを　たすけてくれたの。
だから　おともだちと　いっしょに、おれいに　きたんだ。」
うわぎに　きゅうきゅうしゃの　ししゅうをした　こが
いいました。そう　マサシくんです。
「ぼく、なつの　あいだ、いなかの　おじさんの　うちへ
あそびに　いっていたの。
みて、こんなに　くろく　なっちゃった。」



こどもたちは
しゃこの　かべに
えを　はりました。
二十まいも　ありました。
ぴぽくんが　二十だいに
ふえたのです。
　そのばん、
ぴぽくんは　なかなか
ねつかれませんでした。
「どれが　いちばん
　ぼくに　にてるかい。」
　はしごくんや
ポンプくんに、
いくど　きいたことでしょう。




あつこ
ゆきお
けんじ
しんた
まさし
ひろみ
せいこ
かずお
さだお
みねやす
みちる
としお

それから
ぴぽくんは、
すっかり　げんきに
なりました。
みみを　すませて
ごらんなさい。
ピーポー
ピーポー
ぴぽくんが、
みどりまちを
はしりまわっている
おとが、ほら、
きこえるでしょう。



きゅうきゅうしゃの ぴぽくん　（作／砂田 弘　絵／高橋 透）　N.D.C. 913　48p　ISBN4-03-231040-8
1983年5月1刷　発行者／今村 廣　発行所／東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5　偕成社
1983年11月2刷　印刷／株式会社金羊社　製本／株式会社サンブック　printed in Japan

Published by KAISEI-SHA, Ichigaya Tokyo 162.

偕成社 《のりものストーリー 4》

